

笹物語

一

一



麦生工

県境を越えた
奥祖谷にも
麦生土という
地名がある。



至
越

2002年の高知国体では山岳
競技成年女子の予選が行な
われ、普賢堂から笹越へ至る山
～峠の区間で10kgの荷物と
背負い、競争された。
選手、審判、役員など約800
人が物部に着きたといふ。
明賀から峠まではその時に
舗装された。
ダートはオフロードバイクが
どってり走り来ている。

物部の山は地質がむく
地帯で、地帯でもある。
以前、昔で土砂災害が頻発
して出ていたが、今になり
住民は家を建て、買物
に14月近く、行っていたこと
もある。

昔の上空は米空軍のF4戦闘機に
二機編隊で飛行し、音速ととも
に飛行して行くことがあった。
近い時は乗員のヘルメットがは
み、見えた。
音速を越えているので音がした
時は前の
一機は飛び去り、後機を目にする。

土佐大岩山へ

矢筈峠
(アリラン峠)

岩屋

車が普及するまで人々は歩くこ
とが生活の石壁だった。
従って歩道で生活の基盤を組
み立て、必要なものは自然の
中から必要なだけ調達し、毎
日を穏やかに、いいに、はは
自給自足で、助け合いながら
暮らしていた。

それは自分の足で山を走り
谷を走り、人と地域を知り、
大地を知り、足を知る、生
まえていたことだろう。
100年経つと文化も文明も価値
観も大きく様変わりし、現代の
生活様式は食料も燃料も
電気も水も、なににもかにも買
っている。物や情報があふれた中
に生きるようになっていく。

山を攻め所として、山の恩恵を
受け、山に畏敬の念を抱き、
山とともに生きてきた山の民の
暮らしは、伝承されることなく
深い山に消えてゆかんとし
て、瀬戸際にある。

三極

昔では極はほとんど作らず
三極を作っていた。
三極は紙幣の原料となり
仲買人が買いに来た。

三極は百円紙幣が
硬貨に変わって価格
が大暴落した。

笹川

角屋

テレビのケーブルが
通っている

笹小学校があった。
(明治17～昭和44)
昭和34年のピークには
50名の児童が通学
していた。



終戦後の昭和20年代、笹から歩いて
峠を越え、祖谷を越え、池田の東にある
辻というところまで泊まりがけでタバコ
の葉を買いに行き、戻ってから刻みタバコ
に加工して売って生計を立てる人もいた。



中番

タイコロは歌を唱う
犬がいて、一躍有名だ。

昭和20年代の人の話、山の中腹には
山を結ぶようにトウバスが整備
されていた。
笹の人で、笹から大西～和久保～
堂床を経て、八丁小屋の上あたりまで
畑を作り、通っていたという信じられ
ないような実話が伝えている。
畑作のみなさん、クヤキなども板に
挽いて担ぎ出す仕事もしていたとい
う。
昔の人の足腰の強靱さ、体力、すごい。
ちなみに中内、和久保から蓮華、神谷
と渡り、阿波と土佐を結んだ産業牛馬道は
西熊往還と呼ばれ戦後しばらくはあ

笹は2024年6月末現在
常時住んでいる人は7人
となっている

昭和20年代の終わりと30年代の初め頃
にかけ、五王堂～明賀～東笹村道の開設に
あたり、戦国のオマケが、つくられた。
ほとんどが20代から30代の男の人で、公民館など
に泊りこんで働いた。
時には地元の人達と酒を飲んで交流もけたら。
技術的にも突破がとて上手だったといふ。
山からの風景が、祖國を思い出せ、空郷の思
いにかきたてられ、アリラン、アリランと故郷の歌を唄
ったことから「アリラン峠」として、金堂村氏が
名付けた。

普賢堂

昔の普賢様として名高く、夏祭日には
祖谷や豊永から参拝者が多く集まり
夜を徹して踊りがあつた。若い男女の
交流の場はとてにぎやかだ。
安徳天皇に供した徳庵という僧が
普賢菩薩を背負って安置したことが開基。
高板山の御陵に眠る安徳帝と、
施設があると伝わり、宝永5年建立。
高板山の北東にあり、陵墓の鬼門を
守っているといわれている。



笹を囲むように奥山は国府山と
なっている。
2023.2.15、北風の強い日、
一日中、山を、境界を、検閲
に従事していた。同僚のリュック
が外に外れた。リュックが、
外れた。リュックが、外れた。

笹は一面が緑色だ。
自然の緑色は暖色にも
寒色にも属さない中間的な
色だから、緑を目にするこ
とで、心身のバランスを整える
効果がある。緑に感謝!!

権現様

オーバーハングの迫力ある巨岩。
下にはお堂があり、毎
11月に大々さんをお祭り
している。

公会堂

朝銅城

岩のような出で、
見張りに
使われた。弓矢に
耐えた。

ナナハツツ

ライオン、龍馬像などを
手がけた彫刻家、政西を
忘る、男の、アリラン、
が、アリラン、が、アリラン、

和国山の山頂
1990年発見

糸橋の橋脚

いちのせ橋

古瀬

石垣

中野と移転前に
二本の柱が

塩の道

観音
開所

工番

至亀ヶ峠

マヌカ養蜂場が
あったところ。

高板山

安徳天皇一行は四国に渡り
祖谷の奥祖谷から土佐に入り、
西熊から入る。ナナハツツで
七つのおまじないをして、一晩
その後、高板山へ向かった。
赤井に飯を喰み、しばらく
平安で、高板山へ向かった。
御陵を御覧、大明神とい
て、祖谷の神地、高板山、
祖谷の地など、祖谷の地、
隠れて、遠くから、
安徳天皇が、高板山から、
かっている。(高板山報)



安徳天皇が
この深山で
少くとも
隠れていた
ことが、
願った。

高板山には、7、8軒の家があり、昭和40年頃
までは人が住んでいた。
木を伐って、下までワイヤーを張って、
滑車で下っていた。

今日、核家族化が、祖谷で、
個人が、それぞれ、時間、
山の上の人が、住まなくなった、
何世代も、一、屋根の下で、
暮らしていたことだろう。

塩買切手

江戸時代の土佐は薩摩とらんで封建制が
強かった。そのため、入国や人の往来を
制限していた。
しかし、山間部では「塩買切手」を、
伊予、阿波、讃岐の三ヶ国へ、
行くこと、認め、武士もこの切手
大目、関所を通行させていたことが、
土佐藩、奥祖谷の記録
にある。



NO.152
2024.7.7セタ